

マタイによる福音書19章「小さき者への心」

1A 神による結びつき 1-12

1B 群衆への働き 1-2

2B 結婚の恒久性 3-9

3B 独身者について 10-12

2A 子供を受け入れるイエス 13-15

3A 永遠の命の約束 16-30

1B 良い行いの破綻 16-22

2B 弟子たちへの報い 23-30

本文

マタイ 19 章の学びです、18 章においてイエス様が弟子たちとガリラヤのカペナウムにて時間を過ごしておられるところを見ました。その時に大事なイエス様の教えがありました、「この子どものように自分を低くする人が、天の御国で一番偉いのです。(18:4)」ということと、「だれでもこのような子どもの一人を、わたしの名のゆえに受け入れる人は、わたしを受け入れるのです。(18:5)」ということです。自分が子どもようにへりくだるということと、また、他者に対して子どもような小さな存在を受け入れるという、この二つです。これが、イエス様の天の御国の姿でした。

そしてついに、イエス様の一行はガリラヤから離れユダヤ地方に向います。ユダヤに入れば、十字架の道を進むこととなります。その途中でも、イエス様はご自分の働きを続けられ、それだけでなく数々のユダヤ人指導者からの挑戦を受けました。その場面を読んでいきます。

1A 神による結びつき 1-12

1B 群衆への働き 1-2

1 イエスはこれらの話を終えると、ガリラヤを去り、ヨルダンの川向こうを経てユダヤ地方へ入られた。2 すると大勢の群衆がついて来たので、その場で彼らを癒やされた。

新改訳 2017 の訳が、とても気に入っています。1 節ですが、これまでは、「ガリラヤを去って、ヨルダンの向こうにあるユダヤ地方に行かれた。(第三版)」となっていました。これだと、ユダヤ地方がヨルダン川の向こう、つまりヨルダン川の東岸にあるかのように聞こえます。けれども、そこはペレア地方と言います。ガリラヤと同様、ヘロデ・アンティパスがそこを統治していました。かつてのガドヤルベンの割り当て地であった所です。聖書地図でぜひ、お調べください。ガリラヤ地方を出て、それからヨルダン川を向こう岸に渡り、そしてその東岸地域を南下しました。それから再び、ヨルダン川を渡り、西岸地域に戻ったのですが、そこがユダヤ地方です。それからエリコを通り、エ

ルサレムへ上がっていったという道筋になります。

そしてそのペレア地方を通られた時に大勢の群衆が付いて来ました。そしてすばらしいのは、「その場で彼らを癒やされた」ということです。イエス様の宣教の動機はいつも、憐れみでした。かわいそうに思われていることでした。弱っている人を、羊飼いがおらず傷を受けている羊のように見ておられました。

2B 結婚の恒久性 3-9

ところが次に、自らを宗教警察のように考えている者たちがやってきます。パリサイ人たちです。

3 パリサイ人たちがみもとに来て、イエスを試みるために言った。「何か理由があれば、妻を離縁することは律法にかなっているでしょうか。」

パリサイ派の人たちが、イエス様を試しています。この試すというのは、試験にかけるという意味もあるし、また、罠に陥れるという悪意もあります。この質問、いや尋問には次の背景があります。申命記 24 章 1-4 節です、「1 人が妻をめとり夫となった後で、もし、妻に何か恥**ずべきこと**を見つけたために気に入らなくなり、離縁状を書いてその女の手に渡し、彼女を家から去らせ、2 そして彼女が家を出て行って、ほかの人の妻となり、3 さらに次の夫も彼女を嫌い、離縁状を書いて彼女の手に渡し、彼女を家から去らせた場合、あるいは、彼女を妻とした、あとの夫が死んだ場合には、4 彼女を去らせた初めの夫は、彼女が汚された後に再び彼女を自分の妻とすることはできない。それは、【主】の前に忌み嫌うべきことだからである。あなたの神、【主】が相続地としてあなたに与えようとしておられる地に、罪をもたらしはならない。」

ユダヤ教の律法学者たちは、厳密にどのような場合に離婚状を書くべきなのかを議論していました。「何か恥**ずべきこと**」をどのように解釈すべきかという議論は有名です。シャマイという高名な学者と、ヒレルという高名な学者の間で学派として分かれていました。シャマイ派は、保守的で厳密な解釈をしていました。この箇所を、「不貞」であるとしました。妻が不貞の罪を犯したら離婚状を出す時に、ということです。ヒレル学派は、もっと広い解釈をしていました。些細な理由でも妻を離別することができるということで、例えば出してくる食事を焦がしてしまった、というだけでも離別できるとしていました。

律法のこの解釈を巡ってイエス様に問い質しているのですが、実は裏の意図があるようです。ここはペレア地方です。ヘロデ・アンティパスが統治しているところです。イエス様の脳裏には、無理やり自分の妻を離縁させて、ヘロディアと結婚したヘロデを咎めたバプテスマのヨハネのことがあったに違いありません。まさに、ここの「何か恥**ずべきこと**」をヒレル学派の捉える「どんな些細な理由でも」というように解釈すれば、正当化できるかもしれなかったのです。イエス様が、ヨハネと

同じようにヘロデの不貞を咎めるような立場を取るならば、その見解がヘロデの耳に入り、ヘロデがイエス様をヨハネと同じように始末してくれるだろうと目算したのだろうと思います。

4 イエスは答えられた。「あなたがたは読んだことがないのですか。創造者ははじめの時から『男と女に彼らを創造され』ました。5 そして、『それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである』と言われました。

イエス様は知恵に満ちた方です。先に説明した律法の解釈の違いは、あまりにも込み入った場合の内容であり、それを離婚してもよいという話ではないことは明白です。しかし、そうした解釈の分かれる問題に触れるのではなく、そもそもの神の言葉の大前提はどのようなのですかと問うておられます。「あなたがたは読んだことがないのですか。」とされていますね、律法を熟知しているはずのパリサイ派に対して皮肉を込めておられますが、それでも明確に、神の言葉ではこう言っているという、神の言葉の権威を前面に打ち出しておられます。

創世の時の男女の創造、それから結婚の始まりを語っておられます。今、大きく秩序が変えられようとしています。世の終わりの徴候とも言えますが、法律によって結婚というものを同性者でも行ってよいとする動きが、世界中で起こっています。けれども、古今東西、もちろん同性愛は存在していましたが、同性による結婚というのは定義から外れるのです。ダニエル書 7 章には、終わりの日に荒らす忌むべき者が、「時と法則を変えようとする」とありますから、その徴の一つでしょう。

そして、「男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる」と主は言われます。これは結婚をする人には、いつも教える箇所です。結婚に必要なのは二段階あります。一つは、「離れる」ことです。結婚というのは一体になった夫婦、つまり新しい所帯が生まれることです。そのためには、親から離れるということが必要です。あなたの父と母を敬いなさいという教えがありますが、もちろん敬うのですが、親を第一にする結びつきを持ったまま、結婚生活をすれば妻との間に親が入ってくることとなります。これが結婚を崩してしまいます。ですから、切り離します。次に、「結ばれる」という決断。妻となる人とは、神を第一にして、その他のことは全て第二、第三にしていくという強い結びつきが必要です。むしろ、夫がキリストを愛し、そして妻がキリストを愛する夫に従うことによって、その強固な結びつきの中で、夫は主に召されたこと、命じられたことを独身の時以上に、行うことができます。

そしてその二つの決断によって、「一体」になります。これは神がひとりであられるという時にも使われる言葉です。一心同体と以前の訳では訳されていました。けれども、一つの体という訳は、ふさわしいです。つまり夫婦によって子が生まれる、その子というのが夫婦が一つになっている証拠である、というところまで含まれます。

6 ですから、彼らはもはやふたりではなく一体なのです。そういうわけで、神が結び合わせたものを人が引き離してはなりません。」

結婚が、誰が結び合わせたのか？神であるということです。ここも大事ですね、これは召しである、自分の好みや選択以上のものです。神がこの人と結び合わせたのだという召しです。自分がどうなのかということは、もちろんありますが、それが結婚を成り立たせているわけではありません。神が結び合わせたのだという確信に基づいて生きています。ですから、当然ながらそれを引き離すことはできません。奇形児でしばしば分離手術がありますね、けれども、あまりにも一体化されていると分離することはできません。それと同じです、引き離そうとしたら互いに深い損傷が出て来るというのが、イエス様の教えです。

これは真新しい教えではなく、旧約聖書の最後の預言者マラキも、教えていたことであります。「2:15 神は人を一体に造られたのではないか。そこには、霊の残りがあ。その一体の人は何を求めぬのか。神の子孫ではないか。あなたがたは、自分の霊に注意せよ。あなたの若いときの妻を裏切ってはならない。」

7 彼らはイエスに言った。「それでは、なぜモーセは離縁状を渡して妻を離縁せよと命じたのですか。」8 イエスは彼らに言われた。「モーセは、あなたがたの心が頑ななので、あなたがたに妻を離縁することを許したのです。しかし、はじめの時からそうだったではありません。」

イエス様は見事に、真つすぐに福音を語られました。何をもちて福音なのか？それは、「心の隠れた事柄を神が裁かれる」ということです。「私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって、人々の隠された事柄をさばかれるその日に行われるのです。(ローマ 2:16)」

そもそも、モーセの律法というのは、「女がたらい回しにされることを戒める」ものであります。離婚状を出して他の男のところの妻になり、その男もつまらなくなって妻を捨てた時には、自分も気が変わってその女を自分のものにする。つまり、自己中心や欲望を使って離婚などすることのないように、ということで離婚をしてよいか、悪いか、そういう文脈ではないのです。なのに、なぜかそれが離婚をしても良いのだということになり、それでどんなことをしても離婚状を出せば離婚できるという身勝手な解釈へと変わっていったのです。そのことをイエス様は鋭く指摘しておられます。

まず、「あなたがたの心が頑ななので」と言われます。自分が妻を気に入らなくなる時に、神が結び合わせたという真理を受け入れないという頑なさがあります。「今日、もし御声を聞くなら、あなたがたの心を頑なにしてはならない。神に逆らったときのように(ヘブル 3:15)」結婚生活における不和で心が苦々しくなり、神の声を聞かないという強情さに発展し、それで離婚に至るということ

です。けれども、その時に離婚状を出したら、妻が他の男と結婚した場合、元に戻せないからね、という強い戒めなのです。

そして、「はじめの時からそうだったのではありません。」とイエス様は言われます。そうです、律法というのは、神の命令があって、けれどもそれを守れなかった場合にも、人に対してそれ以上、悪いことが起こらないように守られるという、追加の掟もあるのです。罪のためのいけにえ、というものはまさにそうです。神は罪を望まれません、罪を犯してしまったらどうするのか？という話をしているわけです。

9 あなたがたに言います。だれでも、淫らな行い以外の理由で自分の妻を離縁し、別の女を妻とする者は、姦淫を犯すことになるのです。」

はい、ここです。これらパリサイ派の隠れた動機をずばっと語っておられます。自分こそが心で姦淫の罪を犯していて、モーセの律法を利用して、離婚を成立させ、そして他の女をめとることを正当化していたということです。ヘロデ・アンティパスが、姦淫のために離縁させたのと同じように、パリサイ派の人たちも、心の中で姦淫の罪を犯しながら、同じことをしていたということでもあります。そして事実、離婚をするという時にそれに踏み切る動機の多くが、「他の男あるいは女」を見つけたから、ということがあります。

ただし、イエス様はシャマイ学派と同じように、例外を設けておられます。「淫らな行い」です。不貞ということですね。結婚にはいろいろな問題が起こりますが、その中で最も大きな破壊要素はもちろん、姦淫の罪です。この時にやむを得ず、離婚をするということはありません。イエス様の父ヨセフが、マリヤが他の男と通じて妊娠したのだと思って、内密に離縁しようとしていましたね、そのような場合です。もちろん、無条件にこれで離婚してもよい、すっきりしたというものではなく、やむを得ず、悲しみを持ってということです。

3B 独身者について 10-12

10 弟子たちはイエスに言った。「もし夫と妻の関係がそのようなものなら、結婚しないほうがましです。」

弟子たちにとっては、この教えが衝撃的でした。ユダヤ人の社会では離婚が頻繁に起こっていたのでしょう。あまりにも高い結婚の倫理に、付いていけないと思ったに違いありません。特に当時のユダヤ社会では、恋愛結婚など存在せず、両親による見合い結婚によります。相手が気に入らなかつたら、牢獄同然だと思ったのでしょう。

けれども私は逆に、ここで神さまの憐れみを見ます。というのは、「離婚というのは多いのだ」と

いう現実であります。離婚によって、ここに書かれているように引き離す、一体になっているものを引き離すという悲しみが、世界に蔓延している、しかもユダヤ教を信じている人々の間でさえ、そのようになっているという現実です。今、キリスト者の間でさえも悲しいことに離婚があります。それは絶対に避けたいことですが、それでも起こります。その時に覚えなければいけないのは、憐れみです。姦淫の現場で捕らえられた女が、「わたしも罪に定めない。もう罪を犯してはいけません。」とイエス様に言われた言葉です。悔い改め、そしてもう一度、イエス様との歩みを始めます。

11 しかし、イエスは言われた。「そのことばは、だれもが受け入れられるわけではありません。ただ、それが許されている人だけができます。12 母の胎から独身者として生まれた人たちがいます。また、人から独身者にさせられた人たちもいます。また、天の御国のために、自分から独身者になった人たちもいます。それを受け入れることができる人は、受け入れなさい。」

弟子は、結婚しないほうがましと言っていますが、むしろ独身でいることのほうが難しい、現実にごくわれないことをイエス様はお語りになっています。コリント第一 7 章 2 節に、「淫らな行いを避けるため、男はそれぞれ自分の妻を持ち、女もそれぞれ自分の夫を持ちなさい。」とあります。パウロはテモテ第一でも、若いやもめは結婚しなさいと勧めている箇所もありますし、結婚することのほうが現実的なのです。

それでも結婚しないで独身を貫くという人で、三つの種類の人をイエス様は挙げておられます。「母の胎から独身者として生まれた人」です。つまり、性的な機能不全で誕生した人です。そして、「人から独身者にさせられた人」つまり宦官です。そして、「天の御国のために、自分から独身者になった人たち」であります。パウロのような人ですね。おそらくパウロは結婚していたけれども、イエス様を主としてから、離縁せざるを得なかったのでしょう、それから独身になっています。パウロは、主の働きのために独身者のままでいることはよいことであるとも言っています(1コリ 7:7)。それぞれ、賜物があります。

2A 子供を受け入れるイエス 13-15

そして次の箇所ですが、実はたった 3 節にしか書かれていない出来事ですが、これがちょうど二つの大きな話の間に挟まれている、中心テーマだと思います。

13 そのとき、イエスに手を置いて祈っていただくために、子どもたちがみもとに連れて来られた。すると弟子たちは、連れて来た人たちを叱った。14 しかし、イエスは言われた。「子どもたちを来させなさい。わたしのところに来るのを邪魔してはいけません。天の御国はこのような者たちのものなのです。」15 そして手を子どもたちの上に置いてから、そこを去って行かれた。

ユダヤ人の中には、長老に手を置いてもらい、祝福してもらう習慣がありました。ここで手を置い

て祈ってもらうのは、そういった背景があるのでしょう。けれども弟子たちが、連れて来た人たちを叱っています。主は、もっと大事なことをしておられるのだと思っていたのでしょう。しかし、そこには子供は小さい存在、ただ親の言うことに従っていればよいという意識がありました。ユダヤ教では、子供は神の賜物であると信じられていましたが、それでも横に置いておいてよい存在でした。けれどもイエス様は、18章で言われたことを実践されたのです。「だれでもこのような子どもの一人を、わたしの名のゆえに受け入れる人は、わたしを受け入れるのです。」というお言葉です。ただ親の言うことを聞くしかない存在、そういう低くされている人々を、イエス様の名によって受け入れるということは、イエス様ご自身を受け入れることです。

思い出しますが、カルバリーチャペル・コスタメサは、当時、チャック・スミスが牧師で、多くの人々が礼拝に来ていました。けれども地元の人たちは、牧師の説教がいいからという理由だけで来たわけではありません。子供礼拝がしっかりしていたからです。まるで大人のために礼拝を捧げさせるように、聖書を創世記から黙示録まで教えることができるようなカリキュラムがありました。チャックは、時間がありさえすれば、子供キャンプや中高生キャンプに参加して、時間を過ごしていました。多くの人は大きなところを見ますが、イエス様の目は、こういった小さなところに向いているのです。

そしてもう一つ、とても重要な事があります。この話が、結婚の教えについての直後にあることです。夫が妻と結ばれて一体となるというところで、子供を祝福する話が出ています。結局、大人のわがままで犠牲を払うのは、大事にされていない子供であります。引き離せば一体になったものが引きちぎられるのですが、実は子供こそが引きちぎられる思いをするのです。

3A 永遠の命の約束 16-30

そして次に続きます。子供を受け入れて祝福されるイエス様に、まことの命を見た青年がいます。

1B 良い行いの破綻 16-22

16 すると見よ、一人の人がイエスに近づいて来て言った。「先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをすればよいのでしょうか。」

午前礼拝で 16-22 節を説教したのですが、もう一度見てみましょう。彼は、イエス様の子供を受け入れるという良い行いに、命を見出したのかもしれませんが。他の教師は偽善的である中で、この教師は本物だと思ったのかもしれませんが。けれども、問題は、彼は的外れな良い行いを求めていることです。簡単に言えば、現代の言葉で言えば、自己実現です。自分が何か良いことを行えば、永遠の命、質のある命を得られると思っていたことです。

17 イエスは彼に言われた。「なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方はおひと

りです。いのちに入りたいと思うなら戒めを守りなさい。」

人には何か良いことが行えると思っているところに、初めから問題があります。本質的に、良いものというのは神お一人にしかありません。そしてイエス様は、「わたしに尋ねるのですか。」と言われることによって、ご自身が神と一つであることを暗にほのめかしておられます。

18 彼は「どの戒めですか」と言った。そこでイエスは答えられた。「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽りの証言をしてはならない。19 父と母を敬え。あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。」20 この青年はイエスに言った。「私はそれらすべてを守ってきました。何がまだ欠けているのでしょうか。」

おそらくイエス様は、敢えて彼が守っていると自負している戒めを並べられたのだと思います。十戒の後半部分を挙げられているのは興味深いです。なぜなら、この青年は、人間中心的な考えになっていたからだと思うからです。初めの神を恐れ敬うということがあってこそ、隣人を自分自身のように愛するという戒めを守ることができます。縦の関係があるから、横の関係があります。横の関係だけを見ていれば、実は本当の意味で横も大切にしていないのです。

21 イエスは彼に言われた。「完全になりたいのなら、帰って、あなたの財産を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を持つことになります。そのうえで、わたしに従って来なさい。」22 青年はこのことばを聞くと、悲しみながら立ち去った。多くの財産を持っていたからである。

彼のつまずきは、富でした。富は祝福の一つであり、神の御国に入るしるしであると、パリサイ人たちの中でみなされていました。ですから、彼が富を持っていることは当然、良いことだとみなされていました。けれども、外側のこれらの行いによっても彼が満たされていなかったのは、分かっていたのです。そこで彼にとって安心感をもたらすもの、自分を成り立たせるもの、アイデンティティーになっているものが富でありました。富んでいないと自分を保てないとなっていたのでしょう。私たちにもそういうものはないでしょうか、「何々がないと、自分はやっていけない。」と。しかし、十戒の最も大きな目的は、「神を神とする」ことです。第一の戒めが、主なる神以外に、他に神々があってはならないということです。人間中心主義、自己実現に陥っていた青年は、神中心、自己実現ではなく自己否定の世界を前面に持ってこられて、打ちのめされたのです。

そして、イエス様は山上の垂訓でも話しておられた、「天に宝を持つ」ことも話されています。永遠のいのちも、天の御国に関わることです。けれども実は、彼は天ではなく地上のことに興味があったのです。良い行い、何か良いことをすることに命を懸けている人は、実は天ではなく地上のものに心が行っています。イエス様の良い行いは、地上で行われるものですが、あくまでも天からの

ものであり、神からの恵みと賜物なのです。

これには、大きな変革が必要となります。しっかりとした思い直しが必要となります。それを悔い改めと言います。イエス様はそのためにマタイ 18 章 3 節で、「まことに、あなたがたに言います。向きを変えて子どもたちのようにならなければ、決して天の御国に入れません。」と言われました。先ほど、イエス様が子供を祝福されたように、18 章ではわざわざ弟子たちの真ん中に子供を連れて来られていました。子供が、天の御国とはどういうところなのかを示す存在なのです。

2B 弟子たちへの報い 23-30

23 そこで、イエスは弟子たちに言われた。「まことに、あなたがたに言います。金持ちが天の御国に入るのは難しいことです。24 もう一度あなたがたに言います。金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうが易しいのです。」25 弟子たちはこれを聞くと、たいへん驚いて言った。「それでは、だれが救われることができるでしょう。」

イエス様は真顔で、弟子たちにお語りになったのだと思います。「まことに、あなたがたに言います。」と言われて、あまり理解されていないと思われたのでしょうか、少し沈黙があった後で、「もう一度あなたがたに言います。」と言われました。金持ちが御国に入るのが難しいということです。これは、パリサイ派の教えていたことと真逆であったので非常に驚いたのです。

この、「らくだが針の穴を通るほうが易しい」という言葉ですが、エルサレムにある小さな門が針の穴と呼ばれていたという解釈があります。けれども、中世にある門は確かにそう呼ばれていたようですが、一世紀のユダヤ社会にはそんな使われ方はしていませんでした。そのまま受けとめればよいです。そして彼らが目にしていた最も大きな動物が、らくだでした。だから、弟子たちの反応が、「それでは、だれが救われることができるでしょう。」であったのです。

26 イエスは彼らをじっと見つめて言われた。「それは人にはできないことですが、神にはどんなことでもできます。」

イエス様は、とても大事なことを話されていることを、「じっと見つめ」ることによって行われました。そう、これは人のできることではなく、神にできることなのだ。金持ちについてですが、山上の垂訓で、神とマモンの二つに同時に仕えることはできない、という言葉がありました。富については、旧約聖書でもバビロンやツロ、またユダさえが、女王ようになって高ぶっている都として描いており、高ぶりを神が裁かれる預言があります。富そのものが悪なのではなく、神に頼らなくてよいとする高ぶりになっています。また富を持ってば力を持てるので、その支配欲も躓きになります。

しかし、イエス様が言われたいことは、そのように悔い改めることのできる業も、人ではなく、神

ご自身の御業なのだということです。人が悔い改めて、キリストの血によって罪を洗い清めていただくということ、その信じるという行為でさえが、神の御霊の助けなしにはできないということであり、ます。言い換えると、神の御霊の力は、らくだが針の穴を通ることもできるようにすることなのだということです。神の救いは、神の救いです。神が救うと決めておられたら、その人は救われるのです。これは奇蹟の領域です。超自然の領域です。私たちが、人々が救われることを願うのは、座禪をして一メートルぐらい空中に浮くよりも、はるかに難しいこと、人間的には不可能な事なのです。

27 そのとき、ペテロはイエスに言った。「ご覧ください。私たちはすべてを捨てて、あなたに従って来ました。それで、私たちは何をいただけるでしょうか。」

そうですね、ペテロや他の弟子たちは、まさに金持ちの青年ができなかったことを、自分たちは行ないました。イエス様が呼ばれた時に、弟子たちは何もかも捨てて、付いて行きました。そしてペテロの言葉が、そのまま彼らの願っていることを物語っています。「それで、私たちは何をいただけるでしょうか。」です。これが、彼らの大きな関心事になっていました。18章1節に初めに、「天の御国ではいったいだれが一番偉いのですか」との問いかけ、それから、20章20節以降にも、なんと母が出てきてイエス様に、息子たちが右と左の座に着かせてくださるようお願いしているのです。そこでイエス様が答えられます。

28 そこでイエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに言います。人の子がその栄光の座に着くとき、その新しい世界で、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族を治めます。

イエス様は、将来の報いについてお隠しになりませんでした。報いというものがあることを否定されませんでした。イエス様は、天に宝を積みなさいと言われましたが、それはまさに報いであり、ます。また、先に18章4節で、「子どもように自分を低くする人が、天の御国で一番偉いのです」と言われて、やはり報いを前提にして語っておられます。私たちは、自分のしていることについて報いがあるからこそ、行っています。神はそのように造られました。報いを期待すること自体は間違ったことではありません。

そこでイエス様が、使徒たちがどのような報いを受けるかを、ここで語ってくださいます。「人の子がその栄光の座に着くとき、その新しい世界で」と言われていますが、これは神の国が到来した時のことです。イエス様が地上に戻って来られて、その直前に天地が改まり、新しい世界において主が御座に着かれます。そしてその時に、使徒たちはイスラエルの十二部族を治めます。それぞれが、十二の座に着いています。これは、地上の王国の千年期において実現するでしょうが、新しいエルサレムでもその名残があります。都の門には十二部族の名が記されており、けれども土台は、十二使徒の名が刻まれている宝石が使われています。

29 また、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子ども、畑を捨てた者はみな、その百倍を受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。

イエス様を信じ、イエス様に従っていく中で、その関係が切れてしまう場合があります。ここに、「家、兄弟、姉妹、父、母、子ども」とありますが、他の写本では「妻」も入っています。コリント第一7章で説明がありますが、自分が信者になったことが不信者の夫または妻が離れていくのであれば、そのままにしないでという教えがあります。これは悲しむべきことで、とても辛いことで、なるべくなら起こって欲しくないことですが、それでもイエス様のゆえに最も近い家族の中で分裂が起こります。事実、世界の数多くのキリスト者は信仰を持ったということだけで、勘当されて、ユダヤ人やムスリムの場合は、葬儀まで挙げられるほどです。息子は死んでしまったということです。思い出しましたが、私がアメリカで学んでいた時に、学友の一人が、モルモン教の宣教師にまでなった人がクリスチャンになったので、それで妻と子供から離れることになったと言っていました。だからその時は独身として学校に来ていました。こういう犠牲があるのです。そして、財産を奪い取られることもあるでしょう。畑も、自分の所有だったのに、それは持って行けず、遺された家族のものになる可能性は大です。

けれども、イエス様は保障を与えておられます。「その百倍を受け」ということです。その失った物を十分に埋め合わせて余りある報いがあるということです。それに加えて、かの世には永遠のいのちの報いがあるということです。

30 しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になります。

ここがイエス様がお語りになり語ったことです。報いを受けるということと、「見返りを受け取る」ということの大きな違いをこれからお語りになります。私たちは、例えば一万円の献金をしたのだから、百倍の報いを受けるのなら、見返りとして百万円の祝福があるに違いないと思ってしまいます。見返りがあるから、だから奉仕をするのだという単純なものではありません。飽くまでも、神のなされた救いに御業にある恵みに感動して、そして応答して行うものです。その中で、先にいる者が後になり、後にいる者が先になることが実は多くいるということです。

ここで確かに、教会の現実としてあるでしょう。熱心に仕えていた人が、どうしたものか信仰から離れることさえあります。そしていい加減だと思った人が、ずっと神に逆らっていた人が、悔い改めて喜びに満たされているということがあります。そして、あまり熱心だと見えない人が神の恵みを沢山受けているように見え、熱心な人がどうしてか愛とか、喜びとか、平安とか、そういった聖霊の実を見ることができないのです。この恵みの原則について、イエス様が五時からの労働者の喩えでお語りになります。